

工学教育における産学連携人材育成

北陸信越工学教育協会 会長
富山大学 工学部長

會 澤 宣 一



産学連携と聞くと、これまでは研究面のことをイメージしたと思うが、これからは教育面についても連携することが極めて重要な気がしてならない。それも、知識や技術といった学問的な側面だけではなく、技術者や研究者として、もっと広く言えば社会人として生きていく力を身につけるという意味での人材育成である。巻頭言としては相応しくないというお叱りを受けるのは覚悟のうえで、私見を交えて、少し問題提起させていただきたい。

最近、入学時の挨拶で、新入生に対して「大学や大学院は社会に飛び立つための滑走路だ」と言っている。小・中・高と勉強して、第一希望の大学かどうかは別として、晴れて大学生になったとき、往々にして次の具体的な目標が見えなくなってしまうことがよくあるからである。本来は大学や大学院を卒業・修了して社会に出るところがスタート地点であり、そこからがまさに人生の本番であるはずである。ところが、「最近の学生は何になりたいという具体的な希望があまりなく、就職活動を始めて、やっと自分の具体的な将来像を考え始める」という教員の言葉をよく耳にする。私もこの言葉には同感であるが、はたして我々の学生時代に、それほど綿密に自分の人生の将来計画を立てていたであろうか。少なくとも自分や自分の友人たちのほとんどは、卒業が近づいて来てやっと、今よりもずっと少ない情報量の中で、何となく自分の好き嫌いや向き不向きを自分で勝手に判断して、なるようになれと腹をくくって社会に飛び込んでいったような気がする。この点については、今も昔も大きな違いがあるわけではない。

では、何が今と昔の学生の意識に相違を感じさせるのであろう。それは社会を生き抜いていくための指標の有無のような気がする。戦後日本は世界が驚愕するような経済復興を果たし、“Japan as No.1”と称えられるような高度経済成長を成し遂げた。その中で、自分たちの親も含めて大人たちはまさに一生懸命働き、その代償として富や豊かさを得た。子供たちも、その大人たちの働き方を目の当たりにし、自分たちも受験戦争などという殺伐とした競争の中に身を置き、不公平や不条理を感じながらも懸命に生きた気がする。しかしながら、このように平穏とは言えない日本の社会の中で、「頑張れば何とかなる。逆に、頑張らなければ置いて行かれる。」という単純な指標は共通であったと思う。水戸黄門の主題歌にある「後から来たのに追い越され泣くのが嫌ならさあ歩け」の世界である。だから、具体的な将来ビジョンがなくとも、その単純な指標を抛り所に生きてゆけばそんなに迷わずに済んだ（良いか悪いかは別として）。ところが、バブルがはじけて、頑張ったからといって幸福が保証されるわけでもなく、イノベーションの陰に職を失う人もいて、競い合ったり序列をつけたりすることは過度に避けられたり、今では、働きたい人も労働時間制限される。一体何を指標に生きればよいか、平穏無事な世の中で心が惑うのも当然のような気がする。

それでは今我々は、学生たちにどのようなメッセージを伝えればよいのか。我々の体に染みついている尺度で物事を語っても、意味を理解はしてくれるものの、彼らの琴線に触れることはないと思う。彼らには、彼らと同じ時代を生きて、いま社会の中でもがいている、将来の自分を照らし合わせて見ることが出来る先輩たちの生の声が必要だと思う。たまに、卒業して10年ほどたった卒業生が訪ねてくることもあるが、ずいぶん頼もしく見える時がある。往々にして、そういった卒業生は、働いている場に、もっと広く言えば社会の中に自分の居場所を見つけ、仕事の中で自分の役割を感じている。これがさらに高じると、プロ意識や仕事に対する哲学に繋がるのではないかと思う。そこで最近では、社会に自分の居場所を見つけた各分野の中堅の技術者を同窓会や地元企業に依頼して、大学と社会のつながり等を体験を交えて語ってもらう講義を行っている。実際の効果はまだ不明であるが、インターンシップや技術的な実習、工学的な講義だけでなく、同じ地面を歩いてき

た、ロールモデルの仕事に対する生の声が必要だと思う。工学部には、企業から来られた実務家教員が他学部より多いと思う。しかし、同じ時代を歩んでいる等身大のロールモデルが彼らには必要ではないかと思う。確かに、企業から見れば、かなり厄介な話かもしれないが、講義を聞いた学生が社会に出て、共感できる仲間として一緒に仕事に携わり、あるいは一緒に社会を支えていってくれば、企業や社会にとってもそんなに悪い話ではなく、それを継続していくことによって、学生を輩出する側と受け入れる側の、新しい形の正のスパイラルが上手く回りだすのではないかと思う。今必要な産学連携による人材育成とはこういうものかもしれない。世の中で、どうやって自分ならではの居場所を見つけ、生き甲斐のある人生を歩んでいけるかを修得することは、今の時代、知識や技術を身につけることよりもずっと難しいのではないだろうか。しかし、人材は次世代の宝である。だから、そういったことを修得する場を産学（本当は官も）総動員で作っていかねばならないのではないだろうか。